昭和62年度厚生省心身障害研究
「家庭保健と小児の成長・発達に関する総合的研究」

乳幼児の相互作用に関する研究
（分担研究：相互作用と乳幼児の心理行動発達に関する研究）

巷野悟郎* 鈴木裕子* 金平文二* 後藤嘉余子* 川合貞子* 佐々木聡子* 小野明美*
井桁容子* 宮城初枝* 近藤洋子**

要約　幼児6名を対象とし継続的に自由遊び場面（子どもだけの活動場面＝A場面、保育者が同室する場面＝B場面、A場面より遊具を取り除いた場面＝C場面）における子ども一子ども相互作用について、その成立、構成メンバー、および各相互作用ユニットに関して検討を行った。その結果相互作用はC場面に多く成立することが認められる反面、多人数の構成メンバーによる相互作用はA場面に多く成立することが明らかとなった。また年長児ほど相互作用の成立が多かった。次いで相互作用の動きかけ行動と応答行動について検討したところ、下位カテゴリーの出現率は場面により多少の差異が認められるものの、共に友好的な行動が多くみられ相互作用ユニットでは親和的働きかけ×受容的応答が多く出現した。

見出し語：子ども一子ども相互作用、乳幼児、自由遊び場面

研究目的　乳児期の母子関係を出発点として子どもの対人関係は拡がりをみせていく。子ども相互の関わりは乳児期にすでに認められ（櫃田、1986）幼児初期には意図的な相互作用が成立し、（武井、1985）相互の関係を深めながら共同的関わりへと進展していく様子がうかがえる。（菊地、1982）関わりの内容も感情を伴った共鳴的関係が成立し（伊志嶺1982、石橋1984）幼児前期の終り頃には一人遊びを残しながらも共感的な遊びをくり返し、協同的な関わりへと発展していく（伊志嶺、1985）ことが理解される。このように幼児前期の子ども相互の関わりは後の対人行動の発達の基礎としても重要であろう。そこで我々はこの時期の子どものより本来的な子ども一子ども関係を見い出すために、制約のない自由な子どもだけの場面の観察を中心に子ども一子ども相互作用の成立とその内容についての様相を明らかにすることを試みた。

研究方法　東京家政大学附属乳幼児研究施設（通称ナースリールーム）の在室児6名を対象とした。

対象児	性別	出生順位（きょうだい）	観察開始時年齢
Y	女児	第二子（兄）	2歳11カ月
U	女児	第一子	2歳3カ月
S	男児	第二子（姉）	2歳3カ月
A	男児	第一子（妹）	1歳9カ月
K	女児	第一子	1歳9カ月
M	女児	第二子（兄）	1歳6カ月

毎週1回1時間、プレイルームで自由に遊ぶ様子を観察し、同時にVTRに録画した。観察場面は子どもだけの活動場面（A場面）保育者が同室する場面（B場面）A場面より遊具を取り除いた場面（C場面）とした。

* 東京家政大学家政学部（Faculty of Domestic Science. Tokyo Kasei Univ.
** こどもの城小児保健部（Faculty of Department of Child Clinic. National Childred Castle.）

なお、今回の報告は62年4月より11月までの観察結果についてのものである。

結果　観察時間内に相互作用が成立した割合示したものが表1および図1である。

表1.　相互作用時間

場面 / 対象児	A	B	C
	%	%	%
Y	36.08	17.53	47.17
U	32.75	23.31	39.39
S	11.44	13.50	—
A	11.44	17.42	30.44
K	17.27	12.83	11.05
M	17.91	8.92	13.67
全体	59.29	33.19	89.67

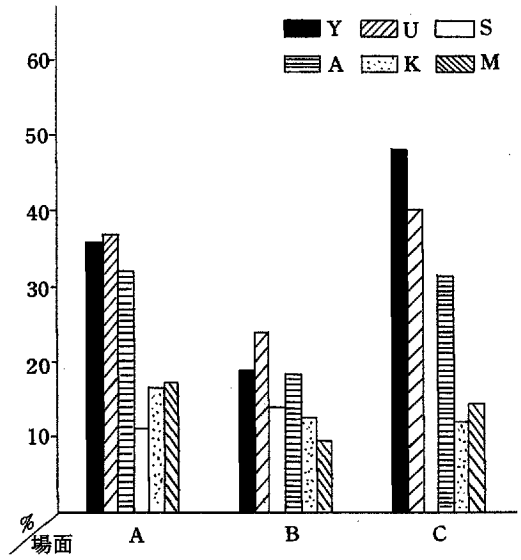

図1.　相互作用時間

表2　相互作用場面と構成メンバー

構成人数 / 場面 / 構成メンバー	A（N$\overline{\times}$=24）		B（N$\overline{\times}$=19.25）		C（N$\overline{\times}$=59）	
	構成メンバー	%	構成メンバー	%	構成メンバー	%
5人	Y×U×A×K×M	0.42	Y×U×A×K×M	3.90		
4人	Y×U×A×K	1.66			Y×U×A×M	1.70
	Y×U×S×A	1.66				
	Y×U×K×M	3.33				
	Y×S×A×K	0.42				
3人	Y×U×S	10.0				
	Y×U×A	0.42	Y×U×A	5.19	Y×U×A	11.86
	Y×U×K	2.08	Y×U×K	5.19		
	Y×S×A	2.08				
	Y×K×M	1.25	Y×K×M	1.30		
	U×S×A	2.50				
	U×S×K	0.42				
	U×A×K	0.83	U×A×K	2.60	U×A×K	1.70
	U×A×M	1.25	U×K×M	2.60		
2人	Y×U	21.26	Y×U	22.08	Y×U	25.42
	Y×S	12.08	Y×S	7.79	Y×S	—
	Y×A	6.25	Y×A	14.29	Y×A	11.86
	Y×K	3.33	Y×K	2.60	Y×K	3.39
	Y×M	0.83	Y×M	3.90	Y×M	1.69
	U×S	6.25	U×S	—	U×S	—
	U×A	5.83	U×A	14.29	U×A	10.17
	U×K	5.0	U×K	11.69	U×K	8.47
	U×M	1.25	U×M	1.30	U×M	6.78
	S×A	2.92	S×A	—	S×A	—
	S×K	0.83	S×K	0	S×K	—
	S×M	0	S×M	1.30	S×M	—
	A×K	4.17	A×K	3.90	A×K	5.08
	A×M	0.83	A×M	1.30	A×M	1.69
	K×M	0.83	K×M	2.60	K×M	10.17

表3. 相互作用ーユニットの内容分類 (%)

項目	場面 / 対象児	A場面 Y	U	S	A	K	M	計	B場面 Y	U	S	A	K	M	計	C場面 Y	U	S	A	K	M	計
働きかけ行動	呼びかけ	32.84	24.53	3.17	6.85	9.38	0	18.87	15.15	23.33	0	2.70	14.29	23.08	14.05	3.85	3.57	—	0	0	0	1.77
	話しかけ	17.16	7.55	1.59	5.48	0	0	8.49	9.09	13.33	0	8.11	0	0	8.26	11.54	21.43	—	30.28	28.57	11.11	22.12
	質問	0	4.72	3.17	2.74	0	0	2.12	12.12	0	0	0	0	0	3.31	0	3.57	—	0	0	0	0.88
	自己主張	0	15.09	6.35	4.11	6.25	12.5	6.37	3.03	13.33	0	8.11	0	0	6.61	0	7.14	—	2.33	0	0	2.65
	指示	16.42	7.55	0	1.37	0	0	7.31	18.18	10.00	0	0	0	0	7.44	3.85	10.71	—	0	14.29	0	4.43
	接近	13.43	12.26	46.03	27.40	40.63	56.25	24.06	24.24	23.33	0	8.11	42.86	46.15	23.14	26.92	21.43	—	16.28	0	44.44	21.24
	接触	17.16	10.38	23.81	15.07	25.0	6.25	16.27	9.09	10.33	100.00	10.81	14.29	7.69	9.92	30.77	14.29	—	2.33	42.86	22.22	15.93
	攻撃	0.75	7.55	4.76	32.88	9.38	25.0	16.14	6.06	3.33	0	5.41	0	0	20.66	7.70	10.71	—	48.84	14.29	0	23.89
	親和的	1.50	2.83	4.76	1.37	0	0	2.12	0	3.33	0	2.70	0	7.69	2.48	11.54	7.14	—	0	0	22.22	6.19
	その他	0.75	7.55	6.35	2.74	9.38	0	4.25	3.03	0	0	0	28.57	15.38	4.13	3.85	0	—	0	0	0	0.88
	計	31.60	25.0	14.86	17.22	7.55	3.77	100	27.27	24.79	0.83	30.58	5.79	10.74	100	23.01	24.78	—	38.05	6.19	7.96	99.99
応答行動	受容	65.49	71.84	81.52	52.17	58.41	64.71	68.16	33.33	57.14	83.33	36.36	47.62	85.71	48.76	41.03	37.84	—	45.45	47.37	42.86	41.59
	承認	7.08	4.85	3.26	13.04	0	0	5.19	10.00	11.43	0	18.18	0	0	9.09	25.64	18.92	—	27.27	5.26	0	18.58
	模倣	17.70	1.94	0	0	0	0	1.18	0	0	0	0	4.76	0	0.83	0	0	—	0	0	0	0
	拒否	23.89	18.45	15.22	30.43	35.85	35.30	23.35	56.67	31.43	1.67	31.82	42.86	14.29	38.02	30.77	40.54	—	27.27	36.84	42.86	35.40
	傍観	17.70	2.91	0	4.35	3.77	0	2.12	0	0	0	9.09	4.76	0	2.48	2.55	2.70	—	0	10.53	14.29	4.42
	指示	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.55	0	0	0.83	0	0	—	0	0	0	0
	計	26.05	24.29	21.70	10.85	12.50	4.01	100	24.79	28.93	4.96	18.18	17.36	5.79	100.01	34.51	32.74	—	9.74	16.81	6.19	99.99

表4. 相互作用ユニット

*P<.05 **P<.01

主体 \ 容体 (場面)	A Y	U	S	A	K	M	B Y	U	S	A	K	M	C Y	U	S	A	K	M
Y		5.44*	6.38**	1.4	1.89	1.25		4.67	6.0	2.33	0.75	0.75		21.0	—	5.0	2.0	0
U	5.67*		3.14	1.78	1.63*	1.0*	4.0		—	3.33	2.33	0.33	16.0		—	4.0	4.0	2.0
S	3.88**	2.71		1.33	0.57	0	0	—		—	0	1.0	—	—		—	—	—
A	1.7	2.22*	1.75		1.78	1.25	5.33	4.33*	—		2.33	0.33	9.0	14.0	—		8.0	1.0
K	0.67	1.63*	0.71	0.44		1.0	0.25	0.67	0	1.0		0.25	1.0	2.0	—	1.0		3.0
M	2.0	0.67	0	0.5	1.0		0.25	2.0	0	0.66	1.0		2.0	2.0	—	1.0	5.0	

相互作用時間はC場面に最も長く、B場面で短い。また場面差はあるものの年長児に長く年少児は短い傾向にあった。

次に一観察時の子ども一子ども相互作用の成立場面と構成メンバーについてみたものが表2である。

相互作用がC場面に極立って多いことがあげられる。またいずれの場面も二者間の相互作用が多く、次いで三者間、四者間以上となる。更に多人数の相互作用場面の成立はA場面に多く、C場面に少ない点が着目される。構成メンバーについても年齢の高い子どもに多人数相互作用への参加が多く、二者間の相互作用も同様の傾向が認められる。

次に相互作用の各ユニットを働きかけ行動と応答行動に分け分類したものが表3である。

働きかけ行動、応答行動ともに下位カテゴリーの出現率は場面により異なる様子がわかる、また各場面の個々の行動量を比較すると働きかけ行動ではY・U・Kが、また応答行動ではK・Mに場面差が少い。

更にユニットごとの出現率を示したものが表

4である。働きかけ行動は親和的(+)と指示的(−)に、また応答行動は受容的(+)と拒否的(−)に二分し検討したところ、いずれの場面においても親和的・受容的関係（＋、＋）が多く成立しており、指示的・拒否的関係は少なかった。特にA場面でこの傾向が認められる。また同年齢女児間（Y×U、K×M）、年長児→年少児で親和的・受容的な相互作用が成立していた。

考察　対象児の相互作用成立時間の違いについては（表１）、子どもの対人行動の発達の差異とともに、保育経験が要因として考えられよう。またB場面で全体的に時間が短く相互作用が低調である様子も伺えるが保育者の同室している場面であることや観察初期には保育者との関わりを求める様子が観察されたこともあり、それが低調の誘因となっているとも考えられる。またC場面に関しては机、椅子、電気のスイッチ、水道の所にあるスポンジ、タオルなどを有効に用いて相互作用を成立させる様子やイメージを共有した遊びなどが観察された。これらより子どもは、場面に則して人やものと関わりながら活動を展開し、自らの遊びのエネルギーを発散させていくことが理解される。

次いで相互作用場面とメンバーについてみると（表２）多人数の相互作用の成立が場面により傾向を異にする点と、C場面の特異性が特徴としてあげられよう。４人以上の相互作用の成立する場面は活発に活動した後の静的な活動の際に多く観察され、自由度の高いA場面では子どもの自然な生体の動と静のリズムが、活動にそのまま顕現されてきているとも推察される。C場面については、遊具がなく少ない用具を共有せざるを得ない状況であることや、遊びの対象が同室の子どもでしかないことが必然的に相互作用場面を多くしたと考えられる。

更に構成メンバーをみると、参加度と年齢とはほぼ比例関係にあることがうかがえる。殊にY×Uは各場面とも関わりが多い。両者とも女児でグループの中では、年長であるという共通点が相互作用を活発にしているとも考えられる。またK、Mといった年少の子どももA場面では３人以上の相互作用への参加が多い。K、Mは観察の回を重ねることに集団の一員としての自覚や仲間との連帯意識もみられるようになり、自由度の高いA場面でそれが顕現されてきていると推察される。

また相互作用の内容分類（表３）より、働きかけ行動はいずれの場面も動作先行の働きかけ（動作による働きかけに言語が追随する）が言語先行の働きかけ（言語による働きかけに動作が追随する）よく多くみられ、言語発達の途上にある幼児前期においては動作がコミュニケーションの手段として重要な役割を果たしていることが理解される。また親和的な働きかけ行動の多いことや受容的な応答行動が多いことから、構成メンバー間に仲間意識が育ってきている様子がうかがえる。下位項目を比較すると、A場面に攻撃行動が少く、B場面に接触が少ないことや、C場面に話しかけが多いこと（以上働きかけ行動）、またA場面に受容行動の多いこと、C場面に拒否が多い（以上応答行動）ことなど、場の設定状況により変化がみられた。子どもはそれぞれ場面における人的・物的現境を感受し行動化をはかっていると考えられる。例えばAのB・C場面における攻撃的な働きかけの高出現は保育者との関わりや活動のエネルギーが発散しきれないという誘因によるとも考えられ、またMのB場面における働きかけ行動の高出現は保育者が同室することにより安定感が得られ、活動の積極性が促された結果の現われとも考えられる。子どもたちの場面の関わり方は個々の発達・経験により異なり、それが行動を規定していくともいえよう。

更に相互ユニットからは、同年齢児間ではお互いの存在を尊重した関わりであり、年少者に対しては思いやりや、いたわりをもって接している様子が親和的×受容的ユニットの多いことから推察され、友好的な関係の成立が認められる。しかしながらAが主体となる相互作用はいずれの場面も指示的、拒否的であることも特徴としてあげられA×Kの場合では、どちらが主体となっても指示的・拒否的な関係を成立させている。Aの遊びの観察からは、女児の多い集団で遊びのイメージの共有が困難であることや、親和的な働きかけ行動の習得が不十分な様子がうかがえ、それが攻撃行動や指示的行動といっ

た行動型をとる誘因となっているようである。以上ユニット各の相互作用について検討してきたが、仲間意識をもった友好的な関係が多く成立しており、年長児の親和的な関わりがひいては年少児の行動のモデルとしての役割を果たすことも期待されよう。

最後に相互作用と遊具の関係について検討した結果からは、遊具を媒体として相互作用が生起することが極めて多く、しかも多人数の相互作用の成立や長時間の相互作用の成立には遊具は、必要不可欠のものであると考えられる。C場面での多人数の相互作用が少ないことの一要因としても遊具のないことがあげられる。

相互作用で使用度の高い遊具は、パイプ馬、三輪車などの移動遊具（33.8％）、滑り台、タイヤシーソー、などの固定遊具（25.5％）であった。A、Bの両場面を含めて椅子、靴、スイッチなどの遊具以外の物を媒体としての相互作用がなされる様子もみられた。（8.1％）「みたて」や「○○のつもり」活動にも、遊具以外のものが代用され活動が展開される場合もみられる。相互作用を活性化させる材料の乏しいC場面であっても十分に相互作用が展開されたのであろうと推察される。

子ども一子ども相互作用について対象児、観察場面の特徴について量的な分析を行ってきた。しかしながら行動は一連の流れの中で生起し、終結するものであり全体の文脈の中での相互作用の把握も行動分析的な視点では重要であろうと考える。今年度の結果をふまえ、今後は相互作用の質的な分析と時系列的なアプローチを試みるとともに、現在整理中のプレイルームにおける行動の軌跡の分析も行っていきたい。

文献

1）櫃田紋子他：乳幼児の社会性の発達に関する研究６：日本教育心理学会第28回大会総会発表論文集、P470－471、1986

2）菊池敦子他：１才児における対人関係の発達について：日本保育学会第35回大会研究論文集、P120－121、1982

3）石橋由美：保育所２・３歳児クラスにおける仲間関係の発達：日本保育学会第37回大会研究論文集、P130－131、1984

4）伊志嶺美津子他：１才児における対人関係の発達について：日本保育学会第35回大会研究論文集、P118－119、1982

5）伊志嶺美津子他：３才児における対人関係の発達について：日本保育学会第38回大会研究論文集、P562－563、1985

6）武井澄江他：幼児初期の対人行動の発達：日本教育心理学会第28回大会総会発表論文集、P316－317、1985

Abstract

A Study of Infant and Infant Interaction

Goro Kohno,* Yuko Suzuki,* Bunj Kanehira,* Kayoko Goto,* Teiko Kawai,* Satoko Sasaki,* Akemi Ono,* Youko Igeta,* Hatsue Miyagi,* Youko Kondo**

We studied about the relation between infant—infant interaction.

We observed three kinds of diffrent situations. Situation A, that is the scene given toys and a absented nursery teacher. Situation B, that is the scene given toys and presented nursery te--acher. Situation C, that is scene nothing toy and absented nursery teacher. We found stron--gest interaction in the situation C and many kinds of activities between infants, And most of the interactions were very friendly.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約 幼児 6 名を対象とし継続的に自由遊び場面(子どもだけの活動場面＝A 場面、保育者が同室する場面=B 場面、A 場面より遊具を取り除いた場面=C 場面)における子ども-子ども相互作用について、その成立、構成メンバー、および各相互作用ユニットに関して検討を行った。その結果相互作用は C 場面に多く成立することが認められる反面、多人数の構成メンバーによる相互作用は A 場面に多く成立することが明らかとなった。また年長児ほど相互作用の成立が多かった。次いで相互作用の動きかけ行動と応答行動について検討したところ、下位カテゴリーの出現率は場面により多少の差異が認められるものの、共に友好的な行動が多くみられ相互作用ユニットでは親和的働きかけ×受容的応答が多く出現した。